

# SHOW HEY シネマルーム

★★★

## サウンド・オブ・サイレンス

2002 (平成14) 年12月5日鑑賞

Data

監督: ゲイリー・フレダー

出演: マイケル・ダグラス/ショー  
ン・ビン/ブリタニー・マ  
ーフィ/スカイ・マッコール  
・バーツシアク

### 👁️👁️ みどころ

精神病の少女から6桁の数字を聞き出せ! 8歳の愛娘を誘拐され、そう命令された精神科医はやむなく必死の行動を開始した。3種の物語が絡み合いながら数字の謎が解き明かされていく。お馴染みのマイケル・ダグラス主演のサスペンスだが、ちょっと不満もあり・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <仕事と家庭に理想的な男性>

マイケル・ダグラス主演のサスペンスもの。彼が演じるのは、仕事は有能、その上家庭では良き夫、良き父というアメリカではよくある理想的な男性。精神科のネイサン医師。

謝肉祭の前日、彼は、スキー旅行で骨折したためベッドで寝たきりの愛妻アギー (ファムケ・ヤンセン) と8歳の愛娘ジェシー (スカイ・マッコール・バーツシアク) が待つ家へと車を走らせていた。そこへ友人の精神科医サックス (オリバー・プラット) から電話。仕事の応援要請だ。断り切れずネイサンは、ブリッジビュー病院へ。

#### <エリザベスとのご対面>

病院で会ったのは、看護士に傷害を負わせた、過去10年間精神病棟に収容されていたという少女エリザベス (ブリタニー・マーフィ)。サックス医師は、エリザベスについて適切な治療方法が見つけられなければ、次の施設に強制的に収容されるため、最も信頼する有能なネイサンに応援を求めたのだ。

病室の中で向かい合う二人。決してしゃべらなかったエリザベスは、ネイサンの巧みな聞き取りテクニックによって口を開いたが、彼女の口から出たのは、「誰にも言うものですか・・・。決して誰にも・・・。」という趣旨不明の言葉だった。ネイサンは、医師として

の興味を深め、次の面談を約束した。

このシーンは、この映画の予告編で再三使用された有名なシーンだ。

### ＜映画の構成—その1＞

サスペンス映画の評論で、次々とストーリーを書いていくのは野暮の骨頂というもので、これ以上は書かないが、この映画は3つのストーリーから構成されている。まず本筋は、ネイサンの愛娘ジェシーの誘拐。犯人は電話で、「一切の要求をするな。命令に従え。」「誰にも知らせるな。」等のルールをつきつけた上、「今日の5時までにエリザベスから6桁の数字を聞き出せ。さもないと娘の命はない。」ときた。ネイサンは、直ちに行動を開始した。しかし、妻アギーは骨折のためベッドから動けない。ネイサンの動きが進展する中、犯人にモニターで監視されていたアギーにも重大な危機が迫ってくる。

### ＜映画の構成—その2＞

もう一つは、エリザベスの10年前のトラウマ。幼いエリザベスは大好きな父親と幸せに暮らしていた。しかしある時その父親は、赤いダイヤを奪い逃走。そして追いつめられた父親は、エリザベスの目の前で、地下鉄構内で犯人に殺された。その恐怖の中、エリザベスはある秘密をずっと守り続け、そしてその痛みを耐えかねてついに精神病に・・・(?)

映画の中では、随所にこの回想シーンが展開される。有能な精神科医ネイサンは、このエリザベスの心をどう開くのだろうか？

### ＜映画の構成—その3＞

そして第3は、ネイサンがブリッジビュー病院を訪れた日に発見された女性の水死体。彼女は何者か？そして誰によって殺されたのか？それを追う女性刑事キャンディー（ジェニファー・エスポジト）。この3つの全く次元の異なるストーリーが同時平行的に描かれ、最後に収束していくという構成で、結構面白い。

### ＜登場する役者たち＞

まず主役のマイケル・ダグラスは、『危険な情事』（'87）、『氷の微笑』（'92）と、ほぼ同じようなサスペンス作品の主役だから、堂々としたもの。安定感がある。

何といてもこの映画の配役のポイントは、二人の少女。すなわち一人はエリザベス、もう一人はジェシーだ。否応なく危険に巻き込まれていく中、必死に知恵を働かせ、切り抜けていく演技はすばらしいの一言。

そしてカッコいいのが、日本にはまずいないと思われる、殺人課の女性刑事のキャンディー。主役に花を持たせるため、犯人を追いつめたところで撃たれてしまい、犯人逮捕に貢献できないという役回りはちょっと残念だ。謝肉祭でのお楽しみ返上で犯人を追いつめ

ていくスピードと男性顔負けの馬力、そのプロ根性には脱帽だ。

### ＜物足りないモノは何か＞

このように本作品は、「精神病の少女から6桁の数字を聞き出すこと」をテーマとしたサスペンス作品として、それなりによくまとまっている。しかし何となく物足りない。それは多分、あまりにもネイサンを中心に描いており、当初銀行強盗によって赤いダイヤを狙った犯人側の動機やそのための細工が十分に描かれていないためだと思う。

犯人たちは、ネイサンの精神科医としての能力を利用するため、ネイサンの家の上階の婦人を殺害して部屋を占拠し、さらにネイサンの部屋にモニターを設置した。またネイサンとエリザベスとの病室での会話もモニターしていた。しかしこんな細工は、そう簡単にはできないはずだ。だからそんな苦勞も見せて欲しかった。そうすると、犯人とネイサンとの「知的ゲーム」は、もっと緊迫感が出ると思うのだが・・・。

スーパースターだから仕方ないか、と思いつつ、映画ではあまりにもマイケル・ダグラスがスーパーマンになりすぎでは・・・と思ってしまった。

2002（平成14）年12月6日記